

【学位論文審査の要旨】

本学位論文は、地域に住むうつ病のタイ人成人の社会参加の開発をサポートするために、作業療法がどのように働くのかのプロセスを明らかにすることを目的としている。対象は地域サービスでメンタルヘルスケアを提供した経験を持つ作業療法士 14 名であり、インタビューと非参加観察を通してデータを収集し、グラウンデッドセオリー (Charmaz, 2014) により分析している。分析には継続比較法が採用された。その結果、3つの概念によってうつ病に対する積極的地域作業療法サービス (Proactive Community Occupational Therapy Service for Social Participation Development; PCOTS-D) が描出された。3概念は具体的には①うつ病ケアを地域作業療法サービスに統合すること②意味のある参加を支援すること (患者のセルフマネジメント、家族の参加の実践) ③協働的なネットワークを作ること (地域の専門職間、作業療法士のネットワーク) であり、概念①と②、①と③は積極的サービスの働きかけの関係と相互的つながりを持ち、概念②と③は凝集性を形成するという、概念間の相互の関係性を持っていた。本研究の結果は、今後のタイのうつ病の精神保健サービスの充実に有用であり対策の根拠となる。研究手法が十分検討されており、論文は論理的に構成されており、論旨も一貫している。東京都立大学荒川キャンパス研究倫理委員会、タイ国のスワンプルン精神科病院の研究倫理委員会の承認を受けており、倫理的な配慮も十分なされていた。なお本論文は国際的な学術誌である *Occupational Therapy International* 誌に掲載されている。

副論文はうつ病の成人の社会参加を支援するための非薬理的な治療についてのシステマティックレビューであり、作業ベースの介入および認知行動療法ベースの介入が有効であり、ポジティブな行動変容を支援することで社会参加を促進し、抑うつ症状を改善することが明らかになった。国際学術誌 *Occupational Therapy International* に掲載されている。

最終試験の質疑応答では、システムの観点として本研究結果を見る可能性、PCOTS-D の実践・普及方法、タイ以外の社会での応用の可能性、当事者の意味のある社会参加を重視する理由、研究の将来的な発展の方向性等について質疑がなされた。システムの観点については家族をシステムとして捉える視点を交え肯定的かつ臨機応変に回答していた。タイの社会文化的な背景に基づく点と他の社会へ応用可能な点の両方を明確に整理した上で回答していた。本研究はタイ国内の他の地域、同様に精神保健の専門職や作業療法士など人的資源が限られているとう問題を持つ他の国にも汎用できるものと考えられた。本研究は作業療法に貢献しうる研究であると評価された。COVID-19 感染下における発展の可能性など、将来の研究の発展についても明確なビジョンを持っていた。

申請者は更にうつ病の成人を対象とした研究も行い、当事者・作業療法士双方の視点からの研究を行い、また社会文化的な視点からの論文も合わせて計 2 本の論文を国際誌に投稿するなど、研究を発展させている。申請者の研究に向かう姿勢は真摯で熱意があり、コロナ禍の困難な状況下でも労を惜しまず研究活動を行っており、研究者としての資質も十

分と考えられる。

以上のことから、本研究が博士論文に値すること、著者が博士の学位（作業療法学）に相当することを認める。